

13

豊橋

南陽中学

名前 濱 朋基

分科会番号

3

分科会名

社会科教育(中学校)

多くの人との関わり合いを通して、主体的に社会参画しようと自ら考え行動できる生徒の育成
—2年生社会科「地域調査の手法」「地域の在り方」の実践を通して—

1 研究要項

(1) 研究主題の捉え

社会的な見方や考え方を働かせ

生徒の住んでいる地域を教材として、自分たちの生活と関連づけて学びを深めていく。生徒が自分の課題をもち学び合うことで、多くの視点や立場から課題を捉えることで、多面的・多角的に捉え深い学びにつながると考える。

仲間とともに

学級の仲間だけでなく、ゲストティーチャーや下級生など学びを通して関わるすべての人を「仲間」と捉える。多くの「仲間」と学ぶことが多角的な学びにつながると考える。

よりよい社会づくりへの参画をめざす

「よりよい社会」をSDGs 目標11と関連付けて考え、「住み続けられるまち」と捉えた。また、参画については、「よりよいまちづくりのために、自分たちの考えを実現していこうとする」とことと定義した。

(2) 目指す生徒像

持続可能な社会の形成のために、主体的に社会参画しようと自ら考え行動できる生徒

(3) 研究の仮説と手だて

<仮説>

「地域調査の手法」「地域の在り方」の単元において、生徒にとって身近な地域を教材にした単元構想を工夫したり、多くの人と関わる場を設定したりすれば、主体的に社会参画しようと自ら考え行動できる生徒が育つであろう。

手だて①「身近な地域を教材にした単元構想の工夫」

ア. 南陽校区を調査対象とした単元の設定

2年生の社会科地理の単元のうち、「地域調査の手法」は生活地域の調査方法を学ぶのが主な学習内容になっており、「地域の在り方」は地域の地理的な課題の解決を中心とした学習内容になっている。そこで生徒が興味をもち調査を進めやすい南陽校区を調査の対象とし教材研究を進めることにした。南陽校区では、令和5年6月2日の大雨の影響で、道路が冠水する被害があった。そこで、そのときの写真を提示して、体験を語り合う中で、自然災害に弱いというこの校区の課題を掘りおこしていけると考えた【資料1】。大雨や津波など、生徒たちが興味関心をもったテーマを追究していく中で、「自然災害に対応できる地域にしたい」という思いを高め、課題の解決法を考えていけるように単元を構想する。

イ. 「ふり返し」を次の学習につなげる単元の構想

ふり返しに「次の授業でやりたいこと、考えたいこと、知りたいこと」という項目を立てる【資料2】。生徒の書いたふり返しを共有し、生徒の思いや考えに沿った活動を進めていく。また、生徒のふり返しをもとに対話をする中で、生徒の思いや考えを引き出したり、考えをより具現化させたりできるようにする。更に、意図的指名によって、次の活動への意欲を学級全体に広げていく。

手だて②「多くの人と関わる場の設定」

ア. 学級の仲間と関わる場の設定

仲間との関わりにより、一人では気づけなかった点に気づけたり、仲間の意見を取り入れることで自分の考えを深めたり広げたりすることができるようグループで活動計画を立て、地域調査を進めていく。

イ. ゲストティーチャーや下級生と関わる場の設定

生徒たちが校区をよりよくしていきたいという気持ちを高めたり、考えてきたことを自信をもって行動に移せたりするように自治会長や市役所の職員の方をゲストティーチャーとして活用する。また、学んだことを下級生に伝える場を設けたり、自治会長や市役所の方に相談する場を設けたりすることで、行動を具現化していく。

ウ. ICT 機器を活用する場の設定

生徒たちが視点をもち仲間と関わり合い、考えを深められるよう、問題解決を進めていくうえで困っていたり悩んでいたりで場面面で、生成AIを活用し検索結果を生徒に提示する。また、話し合いではタブレットの協働学習支援ツール(コラボノート)を活用し、誰がどのような考えをもっているかを明らかにして、「この子の意見を聞きたい」という思いをもち、関わっていけるようにする。

【資料1 生徒に提示した6月2日の写真】



【資料2 本単元のふり返し用紙】

ふり返し No. _____

姓 名前 _____

① 今日の授業でわかったこと・学んだこと

② 今日の授業で考えたこと、疑問に思ったこと

③ 次の授業でやりたいこと、考えたいこと、知りたいこと

2 研究計画

(1) 仮説の検証方法

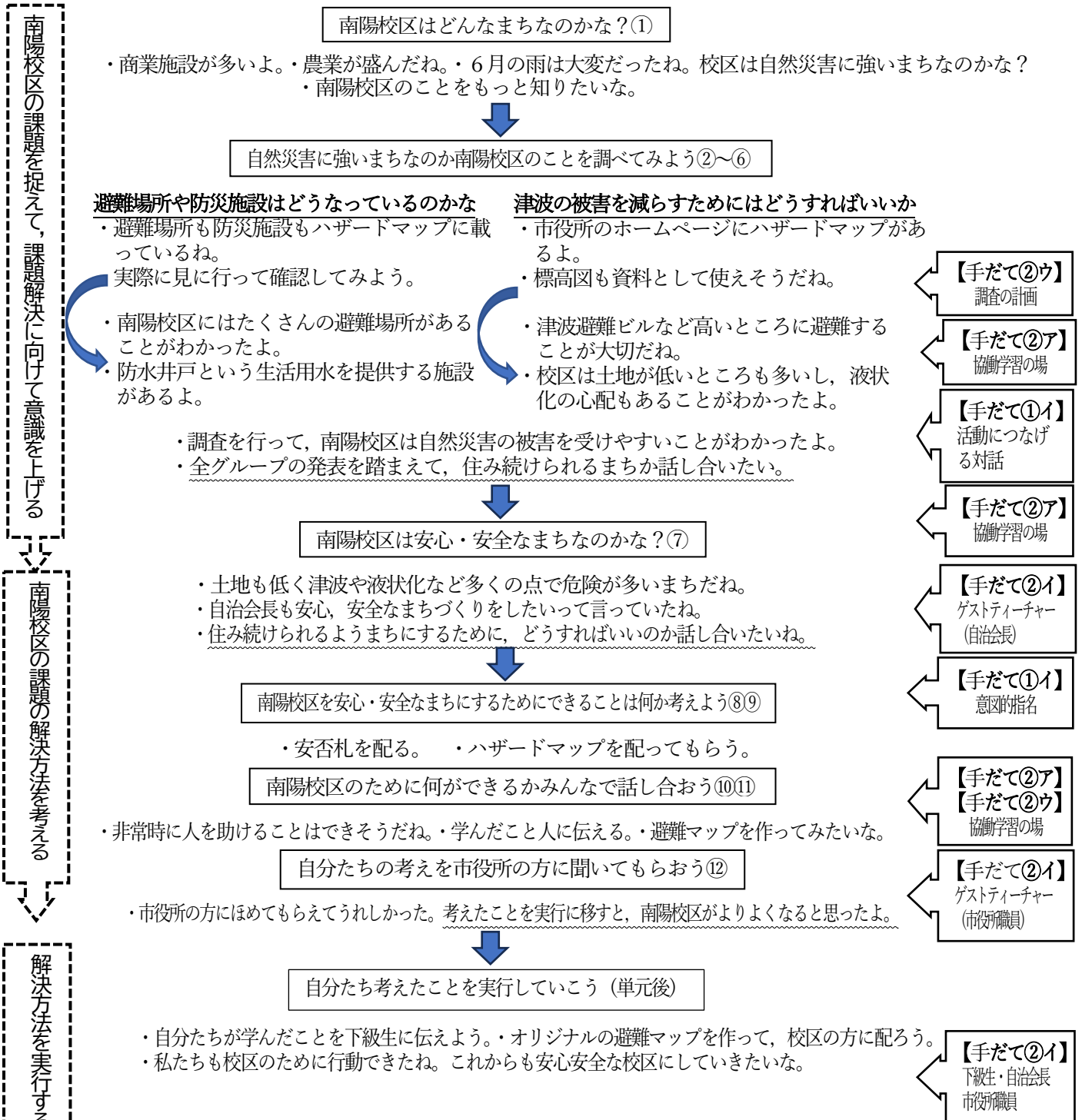
抽出生徒Aと、学級全体の変容を追い、手だての有効性を検証する。

生徒Aは社会科の授業に意欲的に取り組んでおり、写真資料から考察したり比較しながらグラフを読み取ったりするなど、根拠をもって自分の意見を発言することができる。単元前に行った事前アンケートでは「南陽校区のことをあまり好きではない」と回答した【資料3】。理由には「大型ショッピング施設があり、治安があまりよくないと思うから」と答えている。さらに南陽校区には課題はなく、自分が校区のために取り組んでいることもないと回答した。アンケート結果から生徒Aはあまり南陽校区のことを知らないために、漠然と「校区のことをあまり好きではない」と答えたのではないかと考えられる。また、生徒Aと似た考えをもっている生徒も本学級には多くいることがわかった。そこで生徒Aに自分の住んでいる地域のことを考え、よりよくしていきたいという思いをもたせることが学級全体の様子を知る手がかりと考え、この生徒Aの思いを高めていこうという願いをもった。

【資料3】生徒Aの事前アンケート結果（一部抜粋）	
質問事項	生徒Aの回答
南陽校区は好きですか	あまり好きではない
南陽校区はずっと住み続けられるまちだと思いますか	そう思う
ずっと住み続けられるするために課題はあると思いますか	ない
よりよい校区にするためにしていることはありますか	ない

(2) 研究の構想図

- ・南陽校区に着目させ地域調査の対象とした単元構想 【手だて①ア】
- ・波線からの矢印は生徒のふり返りから次の活動につなげている 【手だて①イ】



3 研究の実践と考察

(1) 南陽校区はどんなまちなのか？ (第1時)

第1時では単元の導入として、南陽校区はどのようなまちなのかを考え、地域調査のテーマ決めを行った。南陽校区のよいところと課題を話し合い、様々な意見が出る中で、生徒Aは「南陽校区は生活しやすいし、特に課題はないと思う。」と発言した【資料4】。多くの生徒が具体的に校区の課題に気づけていないことがわかったため、6月2日の大雨で道路が冠水している写真を提示した【資料1】。生徒Dは、「家の前を内張川が流れていて、この日は水の量がものすごく怖かった。」と発言した。生徒Aのふり返しには「土地が低く津波や川の氾濫がおきたときの危険があることがわかりました。(中略)もっと自分の地域について知ろうと思いました。」という記述があった【資料5】。単元前のアンケートで校区に課題はないと考えていた生徒Aが、校区の課題を見つけ、もっと詳しく知りたいという思いをもち始めていることがわかる。生徒Aのこの思いを学級で共有したところ、全員の生徒が自然災害の心配があると考えていたため、地域調査のテーマを「自然災害」とし、調査に取り組むことにした。

(2) 自然災害に強いまちなのか南陽校区のことを調べてみよう (第2～6時)

第2時から第5時を地域調査の計画、調査まとめの時間とし、第6時を調査の内容の発表の時間とした。第2時では、自然災害の中で特に自分たちが興味・関心のある内容を深く調査することで、すすんで活動に取り組むことができると考え、グループで話し合い、調査計画を作成する時間を設けた。生徒Aは前時のふり返しで、南陽校区は「土地が低い」ことやそのために「津波の被害がある」ことを記述しており、グループの仲間に「津波について調べたい。」と提案している【資料6】。グループでの話し合いを進めていくうちに、「土地の低さを調べる」や「避難場所を調べる」などの意見が出された。生徒Aのグループは「身近な地域で津波の被害を減らすにはどうすればよいか」という調査テーマを立てた。テーマは決まったが、なかなか調査計画が進められずいたため、生成AIを使って「どのような調査を行えばよいか」を検索して、生徒Aたちのグループに提示した【資料7】。それをもとに生徒Aたちは話し合い、調査計画をまとめることができたため、生成AIの結果は生徒Aたちの考えるきっかけになったと考えられる【資料8】。

地域調査を進めていく中で、生徒Aは南陽校区には津波避難ビルがあることを調べ、「地図や資料も取り入れたい」と第3時のふり返しに書いた【資料9】。実際に現場付近を見に行き、様子を観察することで、より理解が深まり、写真を撮れば資料として使えると考え、生徒Aのグループに実際に見に行くと様子もわかり、写真を撮れば資料になると助言すると、生徒Aは「(現地に)行ってみようかな。」と発言した【資料10】。生徒Aのグループは休日に現地に行き、津波避難ビル周辺の様子を見たり写真を撮ったりした。生徒Aは、「思っていたより海に近くて、土地も低かった。液状化の心配もあるし、あそこに避難して大丈夫なのかな。」と体験を通した事実をもとに話をすることができた。教師と生徒Aたちとの対話が、現地調査を行うという学習活動につながったと考えられる。その後も調査を進め、生徒Aのグループは調査のまとめとして「土地が低いところに住んでいる人は、津波が起きた時に地面の液状化のため安全に避難することができないため、南陽校区は住み続けることが難しいのではないかと発表した【資料11】。現地調査から学んだことが地域調査のまとめにも生かされていることがわかる。

生徒Aはほかのグループの発表を聞いて、第6時のふり返しに「全グループの発表を踏まえて、本当に南陽校区は住み続けられるまちなのかどうか、話し合いたい。」と記述した【資料12】。南陽校区の様々な課題が見えてきたタイミングで、改めて「住み続けられるまちなのか」という単元を貫く問いに立ち返ることで、校区の課題をより自分ごととして捉え、課題を解決したいという気持ちが高められると考えた。そこで、意図的指名をして生徒Aのふり返しをクラスで共有し、「南陽校区は安心・安全なまちなのか」

【資料4 第1時の話し合い】

T:南陽校区の課題はありますか?
生徒B:ごみが多い。
生徒C:大型商業施設の前の道が渋滞している。
(中略)
生徒A:南陽校区は生活しやすいし、特に課題はないと思う。
(中略)
T:これ見て。(資料1を提示)
6月の大雨のときの写真だけ覚えてる?
生徒D:家の前を内張川が流れていて、この日は水の量がものすごく怖かった。

【資料5 生徒Aの第1時のふり返し】

自分の地域について人、店、地形などいろいろな視点から考えてみて、南陽校区は店があり、交通の面でも便利だということがわかりました。土地が低く津波や川の氾濫がおきたときの危険があることがわかりました。(中略)もっと自分の地域について知ろうと思いました。

【資料6 第2時のグループでの話し合い】

生徒A:津波について調べたい。
生徒E:津波の何について調べる?
生徒F:津波の被害とか。
生徒A:南陽校区の土地の低さとか?あんまり高くないよね。
生徒F:津波が起きたら逃げる場所とかは?
生徒E:どこに逃げるのかね?ほいっぶ?
生徒A:どこかわからんね。

【資料7】生成AIでの検索結果

あなた
中学生が社会科の授業で地域調査を行います。身近な地域で津波の被害を減らすにはどうすればよいか、テーマに調査します。どのような調査を行えばよいか教えてください。

ChatGPT
中学生が津波の被害を減らすための地域調査を行う場合、以下のような調査を考えることができます。

- 津波の発生リスクの評価
 - 地元の歴史的な津波の記録や、科学的なデータを調査する。過去に起きた津波の規模や被害状況を調べ、現在の津波の発生リスクを評価する。
- 避難経路や避難場所の調査
 - 地域内の避難経路や避難場所をマッピングする。学校、公共施設、高台など、安全な場所を特定し、それらのアクセスや利便性を調査する。

【資料8 生徒Aのグループの調査計画】

21年11月の調査
「南陽校区は住み続けられるまちなのか?」

グループメンバー
5名

調査テーマ
身近な地域で津波の被害を減らすためにどうすればよいか。

仮説
・津波避難パンフレット
・安全避難できるようにする。

調査計画
・集めたい情報
・土地の高低差
・避難経路
・来るまでの時間

調査の方法(野外調査・聞き取り調査・資料を使った調査など)
・ハザードマップ
・地図
・歩く

【資料9 生徒Aの第3時のふり返し】

南陽校区には津波避難ビルが3つあることがわかりました。(中略)地図や資料も取り入れたいです。

を考え、話し合うことにした。

(3) 南陽校区は安心・安全なまちなのかな (第7時)

第7時では自分たちの調査結果や、他のグループの発表をもとに「南陽校区は安心・安全なまちなのかな」について考えた。「南陽校区は安心・安全なまちなのかな」という問いについて、賛成派、反対派の対立だけでなく、同じ賛成派でも意見を交流することで様々な理由に触れることでより、自分の意見を深められると考えた。そこでコラボノートを活用し、賛成派・反対派で付箋の色を分けて、意見と自分の名前を書き込んだ。生徒Aは自分たちが調べた南陽校区の標高の低さや海が近いこと、液状化の可能性が高い地域があることなどの調査結果をもとに、安心安全ではないと考え、「大きな災害が起きたときに土地が低く、海に近い点から復旧するのは難しいと思ったから。」と意見を書いた。その後、自由に意見交流したAは授業のふり返りに、「みんなの意見を聞いて、津波、液状化、高齢化などどこを見てもかなり危険だとわかりました。」と書いており、より具体的に南陽校区の課題を理解している様子がわかる【資料13】。さらに「南陽校区は土地の高いところと低いところがあり、高いところであればまだ安全だと言っていた人がいたけど、昔かなり高いところまで津波が来たって調べている人もいて、大きな津波が来た時に土地が高いところでも危ないと思いました。」と記述し、多くの仲間の意見を聞き、自分の意見を深めていることがわかる。意見交流後、クラスで「南陽校区は安心・安全なまちか」とアンケートを取った結果、全員が「安心なまちではない」と答えた。校区の課題が明確になってきたため自分たちにできることを考え行動に移せるようになってほしいと考え、自治会長さんへのインタビュー内容を生徒たちに伝えた。11年間自治会長を務めており、「校区のみんなが手伝ってくれるまちづくりをしたい。安心、安全なまちづくりをしたい。」という自治会長の思いで、防災倉庫の確認、補充をすることや炊き出し道具の確認を行う目的で餅つき大会を始めたことを紹介した。生徒Aは「校区のために活動してくれている人がいることを初めて知りました。自治会長さんの思いを聞いて、南陽校区を安心・安全なまちにしたいと思いました。」と感想を述べた。生徒Aの感想から、自治会長さんの思いを知ることによって南陽校区をよりよくしたいという思いが高まっていることがわかる。

(4) 南陽校区を安心・安全なまちにするためにできることは何か考えよう (第8・9時)

第7時の結果から、第8時・9時で南陽校区を安心・安全なまちにするためにできることは何か調べて考えた。「社会参画する力」を伸ばすために「今」、「自分たち」でも取り組めることに気づけるようにしたいと考え、「自分たち」「行政等」のそれぞれの立場で取り組めることと、「今」と「将来」の異なる時期で取り組めること、という視点でそれぞれ調べを行い、意見をまとめる時間を設けた。立場を明確にしやすく、仲間の意見からも自分の意見形成に生かせるよさのあるコラボノートに意見を書き込むようにした。生徒Aは自分たちが調べてきた津波の調査結果を踏まえ、「土地が低く地盤がしっかりしているところに津波避難ビルを建てる。」という「行政」が「将来」行うことの立場の意見と、他の班の発表から、各家庭にほとんどハザードマップが保管されていないという事実を知り、「ハザードマップを全世帯に配布する。」という「行政」が「今」行うことの立場の意見を書き込んだ。生徒Aが校区の課題を知り、解決したいという思いはあるが、まだ自分ができることは考えられておらず、行政が解決してくれるもの、という思いが強いと思われた。学級全体を見ても、なかなか「自分たち」が「今」できることに目を向けられている生徒が少なかったため、意見交流する場を設けることにした。

(5) 南陽校区のために何ができるかみんなで話し合おう (第10・11時)

第10・11時間目では、調べてきた内容を話し合い、「自分たち」が「今」できることを改めて考える時間を設けた。全体での話し合いでは、「行政」が行うことの意見が多く出され、「自分たち」が「今」できることでは募金をするという意見がほとんどであった。生徒Aは「市役所にハザードマップを全世帯に配布してもらおう。」と発言した。話し合いを深めるために生成AIで「防災・減災のために中学生ができることは」と検索し、生徒に提示した【資料14】結果、生徒Aをはじめ多くの生徒が「防災グッズを用意する」や「家の家具を固定する」という意見に流れてしまった。このタイミングでの生成AIの提示は、生徒たちの考えを深めることができず、意図しない方向に話し合いが進んでしまい効果的ではなかった。

より自分ごとと捉え、より具体的に考えていけるよう、「あなたが南陽校区のためにできることは何だろうか。」と全体に問い返し、一人調べや仲間と自由に話し合う時間を設けた。生徒Aは「ハザードマップを自分たちで作る。」とコラボノートに書きこんでいた生徒Gと話をし【資料15】、授業の最後には自

【資料10 生徒Aのグループとの対話】

T: ビジネスホテルおかだ家ってホテルってどこにあるか知ってる?
生徒F: (窓の外を指さしながら) あっちの方のホテルだよな?
T: 実際に見たことある?
生徒A: 車で通ったことはある。
生徒E: 見たことない。
T: 実際に見に行くかどうかという場所かわかるよね。写真撮れば、それが資料になるよね。
生徒A: たしかに。行ってみようかな。

【資料11 生徒Aのグループのスライドのまとめ】

津波が来たら、高いところに避難することが大切。
難しい場合は、津波避難ビルに指定されているところに逃げる。
土地の低いところに住んでいる人は、津波が起きた時に地面の液状化のため安全に避難できないため、
南陽校区は住み続けることができないのではないかな。

【資料12 生徒Aの第6時のふり返り】

全グループの発表を踏まえて、本当に南陽校区は住み続けられるまちなのかなどうか、話し合いたいです。また、住み続けられない場合、南陽校区を住み続けられるまちにするためにどうすればいいのか話し合いたいです。

【資料13 生徒Aの第7時のふり返り】

コラボノートでみんなの意見を聞いて、津波、液状化、高齢化などどこを見てもかなり危険だとわかりました。南陽校区は土地の高いところと低いところがあり、高いところであればまだ安全だと言っていた人がいたけど、昔かなり高いところまで津波が来たって調べている人もいて、大きな津波が来た時に土地が高いところでも危ないと思いました。

【資料14 生成AIの検索結果】

防災・減災のために住民ができることはたくさんあります。以下にいくつかの例を挙げます。

1. 災害時の連絡手段の確保: 緊急時には電話回線やインターネットが混雑する可能性があるため、災害時の連絡手段として、携帯電話やラジオの非常用チャンネルを確保しておきましょう。
2. 避難経路の確認: 自宅や学校周辺の避難経路を事前に確認し、地図にマークしておきましょう。避難経路には建物や道路の情報なども含めて詳細に把握することが重要です。
3. 非常食や水の準備: 災害が発生した場合に備えて、家庭内に非常食や水を備蓄しておきましょう。常備食や缶詰、保存食など長期保存が可能な食品と、十分な飲料水を確保しておくことが大切です。
4. 避難場所の確認: 自宅や学校、地域内に避難所となる施設や公園、高台などがあるかを調査し、災害時の避難場所を予め把握しておきましょう。
5. 防災グッズの準備: 非常用の持ち出し袋や防災グッズを用意しておくことも重要です。例えば、懐中電灯、ラジオ、救急セット、防災具、アルミシート、マスクなどです。
6. 災害時の行動ルールの確認: 地震や津波、台風などの災害時には、安全な行動が求められます。地震時の「ドロップ・カバー・ホールド」や、津波時の「高台へ避難」など、基本的な行動ルールを学んでおきましょう。

分の意見としてコラボノートに「少しでも被災者が減るようにハザードマップを作り配布する。」と意見を書いた。

「ハザードマップを市役所に配布してもらおう」という意見から「自分たちで作って配布する」という考えに変容しており、仲間との意見交流により、自分ごととして強く課題を考え始めた様子がわかる。

(6) 自分たちの考えを市役所の方に聞いてもらおう (第12時)

学んできたことを、自信をもって行動に移せるよう、市役所の防災危機管理課の方をゲストティーチャーとして招き、ここまでの学習内容について評価と助言をしていただくことにした【資料16】。市役所の方の「オリジナルハザードマップ作り、非常にいいですね。(中略)防災の勉強では、意識を高くもちましょう、とよく言うけれどなかなか学んだことを実行する人はいない。調べたこと、考えたことをぜひやってみよう。」というお話を聞いた後、生徒Aは「自分たちで考えたことを、実行に移すことまでやると、南陽校区がよりよくなると感じました。(中略)自分だけではなく地域の人とか周りの人も助かってもらいたいから、今考えているハザードマップを作ったりして災害の意識を高めてもらうことが大事だと思いました。」とふり返りに記述した【資料17】。ふり返りから、生徒Aがゲストティーチャーの話を聞き、「校区をよりよくしたい」という気持ちを高め、自分で考えたことを実行に移したいと考えたことがわかる。

(7) 自分たちの考えたことを実行していこう (単元後)

市役所の方に指導助言をいただいて、生徒が考えた案を具現化することで、「社会参画する力」が高められると考え、実際に実行していく場を設けることにした。単元終了後のふり返りに「学んだことを地域の人に広めることで災害が起きた時も安全に避難できる人が増える。」と書いていた生徒Aが、「家族」や「学校の人」には伝えられそうだと話したため、中学1年生に地域調査の結果を伝えることにした。【資料18】。そこで、1年生に学んだことを伝えたいという有志の生徒を集め、調査結果や調べ学習の内容を1年生に伝える場を設けた【資料19】。1年生の書いたふり返り【資料20】を見た生徒Aは「1年生が『先輩達のおかげで災害について学ぶいいきっかけになったと思います。』って言っていて、すごくうれしかった。1年生にもこれから防災の勉強をがんばってほしい。これからも、いろいろな人に伝えていきたい。」と話した。生徒Aの感想から、学習したことを伝えることができ、達成感を味わうとともに、今後も学んだことをみんなに広めていきたい、という気持ちが高まっていることがわかる。また単元終了後、生徒Gの「ハザードマップを作ることはできないか」という提案を聞いた生徒Aが「私も作りたい。」と言ってきたため、希望者を募った。希望者の生徒たちからは「配ってすぐに捨てられたら意味がない。」「豊橋市のホームページに載っている地図とは別のものがいい。」という意見が出た。また、生徒Aは「家族で自然災害について考えるきっかけになるものがいい。」と述べた。生徒たちから出された意見をまとめ、各グループの調査結果を生かして「NOS まっぷ」というオリジナルの地図を作ることにした。表面には家族で話し合って避難場所や集合場所を決めて記入してもらえようとし、裏面には校区の避難場所や避難所、津波避難場所を載せ、話し合いの参考にしてもらえるようにした【資料21】。完成後、地域の人たちにもNOS まっぷを配りたいという生徒たちの考えを実現するために、自治会長に依頼する場を設けた。自治会長からは回覧板で校区に伝えることと校区市民館に掲示することを提案してもらい、さらに「中学生からこのように校区に提案してもらえて非常に嬉しい。これからも南陽校区のためによりよくお願いします。」というお言葉をいただいた。それを聞いた生徒Aは「避難マップをつくることで少しでも地域の人が防災に興味をもってくれるなら地域に貢献している感じがして嬉しかった。また、これを多くの人に知ってもらうために回覧板で回したり、市民館に掲示したりしてもらえるなんて嬉しいし、これが地域全体に広がってもらえると嬉しい」と述べた。生徒Aの発言から、地域に貢献しているという思いや校区がよりよくなってほしいという思いが高まっていることがわかる。

【資料15 生徒Aの生徒Gとの対話】

生徒A:ハザードマップ作りってどういうこと?
生徒G:ほとんどの家にハザードマップがないから、作れないかなって思ってた。
生徒A:たしかに。それなら自分たちでもできるかも。

【資料16 市役所の方の話】



【資料17 生徒Aの第12時のふり返り】

自分たちで考えたことを、実行に移すことまでやると、南陽校区がよりよくなる感じました。市役所の方が一番大事なのは自分の命だと言っていて確かにそうだと思ったけどやっぱり自分だけではなく地域の人とか周りの人も助かってもらいたいから今考えているハザードマップを作ったりして災害の意識を高めてもらうことが大事だと思いました。

【資料18 生徒Aとの対話】

T:学んだことを地域の人に広めることで災害が起きた時も安全に避難できる人が増えるって書いていたけど、誰に伝えられるかね。
生徒A:家族とか。
T:それ大事だね。まだ伝えられる人っている?
生徒A:学校の人とか?
T:それもいいね。1年生が家庭科の授業で防災の授業をやるみたいだけど、1年生に伝えるってどう?
生徒A:やってみたい。

【資料19 生徒Aの発表の様子】



【資料20 発表を見たある1年生の感想】

【先輩の発表を見て思ったこと、気づいたこと】
先輩の伝えたこと、防災の大切さや避難場所の重要性を改めて知ることができた。また、家族や学校の人だけでなく地域の人にも伝えることが大切なんだと気づいた。自分たちも積極的に防災について学んでいきたいと思う。先輩の発表がきっかけで、私も防災についてもっと学びたいと思う。

【資料21 生徒Aたちの作ったNOS まっぷ】

Complex block containing a map of the Noshiro district (NOS map) and a form for family discussions. The map shows evacuation routes and locations for the Noshiro district. The form includes sections for 'Family and school discussion', 'Evacuation location', and 'Evacuation route'. It also contains a note about the importance of the map and a section for '1711?'. The map is titled '中野校区' and '南陽校区 NOS まっぷ'.

4 研究の成果

(1) 生徒 A と学級の単元の前と後での変容について

生徒 A の単元前と単元後のアンケート結果を比較すると、単元前はあまり南陽校区のことが好きではなく、校区の課題についてもないと考えていたが、単元後には南陽校区のことを好きと回答した。現状ではずっと住み続けられるまちではなく、課題を抱えていること、さらにはそのために自分たちに取り組めることがあると考える

質問事項	単元前の回答	単元後の回答
南陽校区は好きですか	あまり好きではない	好き
南陽校区はずっと住み続けられるまちだと思いますか	そう思う	あまり思わない
ずっと住み続けられるするために課題はあると思いますか	ない	ある
よりよい校区にするためにできることはありますか	ない	ある

ように変容した【資料22】。生徒 A の変容を見ると、単元を通してだんだんと校区に愛着を感じ、本研究で目指す「持続可能な社会の形成に、主体的に参画しようと、自ら考え行動できる生徒」に育ったといえるだろう。さらに学級全体の変容を見ても、学級すべての生徒が南陽校区に住み続けるためには課題があると考え、自分たちにできることはあると答えた生徒は88%だった。学級の多くの生徒が校区の課題に気づき、その課題解決のために自分たちにできることがあると考えるようになってきている。学級全体の変容を見ても、本研究で目指す姿に迫れたのではないかと考える。

(2) 手だての有効性について

手だて①「身近な地域を教材にした単元構想の工夫」

ア. 南陽校区を調査対象とした単元の設定について

生徒 A の様子や考えを追っていくと、単元前はあまり校区のことを知らない様子だったが、学習を進めていくうちに、地域のことを考え、よりよくしたいという思いが高まってきていることがわかる【資料23】。南陽校区に着目して単元を構想したことで、地域の課題を自分ごととして捉え、自ら考え解決しようとする変容が見られるため、手だて①アは有効だったと考える。

	生徒 A の様子や考え
単元前	あまり校区のことを知らない（教師予想）
第1時後	もっと地域について知りたい（ふり返り）
第6時後	本当に南陽校区は住み続けられるまちなのかどうか、話し合いたい（ふり返り）
第12時後	自分たちで考えたことを、実行に移すことまでやると、南陽校区がよりよくなると感じた。（ふり返り）
単元後	南陽校区に愛着を感じ、よりよくするために自分にできることを考えている。（アンケート）

イ. 「ふり返り」を次の学習につなげる単元構想について

生徒のふり返りを共有したり対話をしたりすることで、生徒の思いや考えを次の学習課題や学習活動につなげる手だてを講じた。生徒たちは地域の調査を行い、課題を見つけ、課題を解決するためにできることを考え、最後には下級生に学んだことを伝えたり、NOS まっぷを作成したりするなど行動することができた。手だて①イも自ら考え解決しようとする生徒の育成に有効だったといえる。

手だて②多くの人と関わる場の設定

ア. 学級の仲間と関わる場の設定について

グループによる地域調査活動やクラスの友達と関わる「協働学習の場」を設定したことで生徒 A は南陽校区の抱える自然災害に関するさまざまな課題について気づくことができた。さらに、仲間との対話を通して、「ハザードマップを市役所に配ってもらいたい」という考えから「自分たちでマップを作成して配りたい」という思いに変容している。生徒 A の変容から、手だて②アも有効だったと考える。

イ. ゲストティーチャーや下級生と関わる場の設定について

ゲストティーチャーや下級生など様々な立場の人と関わる場を設定した。自治会長の思いを知ることで、自分たちにできることを行いたいという思いを高め、市役所の方の話を聞くことで、自分たちが校区をよりよくすることができるという思いが高まっている。その結果、単元終了後も生徒 A たちは下級生に学んだ内容を伝えたり、NOS まっぷを作成したりするなど、自ら考え行動する姿が見られた。以上より手だて②イも有効だったといえる。

ウ. ICT 機器を活用する場の設定

生徒たちが問題解決を進めていくうえで視点をもち仲間と関わり合い、考えを深められるよう生成 AI を活用し検索結果を生徒に提示した。調査計画を立てるときには検索結果をもとにグループで話し合いが進んでいく様子が見られ有効だったといえる。しかし、第10時の話し合いでは、生成 AI の検索結果を提示することで「今」「自分」にできることに目を向けさせることはできたが、生成 AI の検索結果に生徒の考えが流されてしまい、仲間との関わり合いによって深められる様子が見られず、有効的だったとは言えない。

話し合いではタブレットの協働学習支援ツール（コラボノート）を活用し、誰がどのような考えをもっているかを明らかにして、「この子の意見を聞きたい」という思いをもち、関わっていけるようにした。協働学習支援ツールの書き込みを見て、自分と似た意見の人や興味のある意見をもっている人との関わり合いが生まれていた。

以上より手だて②ウは有効的な場面もあったが課題も残った。

4 今後の課題

本研究では、「地域調査の手法」と「地域の在り方」の単元において、生徒にとって身近な地域を教材にした単元構想の工夫をしたり、多くの人と関わる場を設定したりすることで主体的に社会参画しようと自ら考え行動できる生徒を育成することができた。今回の研究では ICT 活用によってさまざまな可能性を感じられた。特に生成 AI のよりよい活用については今後も研究を進めていきたい。また、個別学習の充実と学級をこえた校内や地域など多くの人と関わり合うことのできる教材開発を行い、歴史分野や公民分野でも「社会参画する力」を伸ばしていく社会科の授業を追究していきたい。